

---

 学 会 記 事
 

---

## 第 5 回新潟腹部救急医学研究会

日 時 平成 24 年 5 月 19 日 (土)  
午後 3 時 30 分～6 時 30 分  
会 場 ANA クラウンプラザホテル新潟  
2 階 芙蓉の間

## I. 一 般 演 題

## 1 80 歳以上の腹部緊急手術例の検討および後天性モルガニー孔ヘルニアの 1 例

植木 匡・石塚 大・多々 孝  
石川 博補

柏崎総合医療センター外科

【対象と方法】80 歳以上を高年齢者とし、2002 年からの 10 年間で検索した。

【結果】緊急手術での高年齢者の割合は、前期 13% (55/435) に比べ後期が 21% (92/438) と増加していた。病態は、腸閉塞 60%、消化管穿孔 24%、腹腔内膿瘍 6% の順であった。腸閉塞の原因疾患は、ヘルニア嵌頓 60%、術後癒着 32%、悪性腫瘍 9%、その他 2% であった。症例として、比較的まれな Morgagni 孔ヘルニアを呈示する。

症例は 80 歳、女性。2011 年 6 月に前胸部を打撲後に軽度の嘔気が出現し近医を受診し、胸部レントゲンにて左横隔膜上にガスを伴う腫瘤像を認めた。食欲不振と嘔気が増強し翌日来院した。造影 CT で、右横隔膜上に肝腹側より脱出する腸管と大網を認め、緊急開腹手術を行った。ヘルニア内容を還納し、嚢を高位切離後、門を閉鎖した。

【結語】高年齢者の緊急手術は近年増加し、ヘルニアが最も多い原因疾患であった。

## 2 80 歳以上の閉鎖孔ヘルニア手術症例についての検討

長谷川 潤・仲野 哲矢・下田 傑  
萬羽 尚子・井上 真・内藤 哲也  
谷 達夫・島影 尚弘

長岡赤十字病院外科

2009 年 1 月から 2011 年 12 月に当科で行われた閉鎖孔ヘルニア手術症例について臨床項目を検討した。

同時期の腹部緊急手術例は 79 歳以下 262 例で虫垂炎が 88 例と最も多く、閉鎖孔ヘルニアは 4 例であった。一方、80 歳以上 77 例のうち虫垂炎は 2 例に過ぎず、閉鎖孔ヘルニアは 12 例と目立って多く見られた。12 例の内訳は男性 1 例、女性 11 例。大腿痛は 4 例に見られた。全例 CT にて診断されていた。発症から手術までは緊急手術 10 例は 3 日、待機的手術 2 例は 7 日と 37 日。7 例にメッシュが用いられた。術後合併症は創感染は 2 例。心不全を呈した 1 例と腸管壊死から肺血症、DIC にて死亡した 1 例を除き経過順調であった。

閉鎖孔ヘルニアは比較的まれな疾患といわれていたが、高齢化、CT 診断の普及により増加していると考えられる。早期に診断、治療が行われれば高齢者とはいえず後は比較的よいと考えられる。

## 3 上腸間膜動脈血栓症に対する経カテーテル的血栓除去術後に発症した腸管狭窄の 1 例

古川 浩一<sup>1)</sup>・山崎 俊幸<sup>2)</sup>・岩谷 昭<sup>2)</sup>  
関口 博史<sup>3)</sup>・小林かおり<sup>3)</sup>・塩谷 基<sup>4)</sup>  
橋立 英樹<sup>5)</sup>

新潟市民病院消化器内科<sup>1)</sup>

同 消化器外科<sup>2)</sup>

同 救命救急センター<sup>3)</sup>

同 放射線科<sup>4)</sup>

同 病理科<sup>5)</sup>

症例は 60 歳代、男性。心房細動内服治療中。2011 年 11 月誘因なく急激な腹痛を自覚、冷汗を認め、近医受診し、当院救命救急センター搬送。

腹部造影CTでは上腸間膜動脈本幹に高吸収域を認め、同部での造影剤の途絶が確認された。上腸間膜動脈血栓症の診断にて経カテーテル的血栓除去術を実施、本幹血栓は除去され、腸管膜の血流は回復した。術中腸管内への血管外造影所見を認めコイルによる止血術を実施。コイル近傍に血腫の発生を認めるものの保存的に縮小が観察され第18病日に退院となる。その後、総合診療科に通院。腹部の違和感、食後の腹痛を訴え、るいそうの増悪認めた。対象療法を行うも改善なく、2012年2月消化器内科に精査依頼となる。臨床症状、経過より腸管狭窄が疑われ、CO2送気後CTにてコイル近傍の限局性の腸管狭窄が確認された。狭窄部を腹腔鏡補助下小腸部分切除し、腹部症状は消失した。病理所見は全層性の線維化を認め慢性の虚血性変化が示唆された。

#### 4 超高齢者(90歳以上)に対して腹部緊急手術を施行した2例

木戸 知紀・須田 武保・寺島 哲郎

日本歯科大学医科病院外科

今回、我々は90歳以上超高齢者に対し腹部緊急手術を施行した2例を経験したので報告する。

〔症例1〕95歳、男性。2004年7月にS状結腸軸捻転を発症し緊急手術を行った。術中所見にてS状結腸軸捻転・右鼠径ヘルニア・進行胃癌を認めた。全身状態を考慮しハルトマン手術のみを行い手術を終了した。術後4日目に右鼠径ヘルニア嵌頓を認め、緊急手術を施行した。22病日に進行胃癌に対し幽門側胃切除術を行った。術後合併症はせん妄・痴呆の進行を認めたのみで53病日に退院したが、4か月後老衰にて永眠された。

〔症例2〕90歳、女性。2010年12月に大腿ヘルニアに伴う腸閉塞症を発症し緊急手術を行った。10病日に肺梗塞を発症、抗凝固薬投与にて治療を行った。右下腿部深部静脈血栓を認め、25病日にIVCフィルター留置術を行った。その後は経過良好であり49病日に退院した。

#### 5 当院における高齢者(80歳以上)緊急手術症例の検討

渡邊 直純・島田 哲也・池田 義之  
林 達彦

厚生連村上総合病院外科

【はじめに】高齢化に伴い高齢者の緊急手術も増加傾向である。今回我々は当院における80歳以上の高齢者に対する緊急手術症例について検討した。

【対象と方法】2007年3月～2012年3月までの5年間に当科で緊急手術を行った80歳以上の45症例を対象とした。これらの症例の手術病名、術式、併存疾患、術後管理、予後を検討した。

【結果】平均年齢86歳、男女比は20：25、手術病名は腹膜炎が17例、術式は結腸切除術＋人工肛門造設術が9例、ヘルニア嵌頓が17例、術式はヘルニア修復術が13例で腸管切除を要したのは3例であった。次いで絞扼性腸閉塞が7例で全例腸管切除を要した。併存疾患が1つ以上ある症例は44例で、2つ以上ある症例は25例であった。術後呼吸器管理を要したのが7例でうち離脱できたのが2例であった。術死は2例で、在院死は6例であった。

【結語】緊急手術時には全身状態は通常よりも悪化し、術前評価も不十分で、耐術性の判断に迷うこともあるが、救命のために必要な手術は行うべきである。

#### 6 豊栄病院における高齢者腹部緊急手術症例の検討

富山 武美・佐藤 一喜・齋藤 六温

厚生連豊栄病院外科

豊栄病院で平成14年4月から平成24年3月までの10年間に豊栄病院外科における手術例は2058例あり、80歳以上の手術例は236例であった。この内外科受診後24時間以内に手術を行った症例は32例認められた。年齢は81歳から95歳、男女比は10：22であった。疾患別に見ると